



TITLE:

[12月24日 講義7 アジアにおける災害対応(2)] コミュニケーションの「場」としての支援事業

AUTHOR(S):

亀山, 恵理子

CITATION:

亀山, 恵理子. [12月24日 講義7 アジアにおける災害対応(2)] コミュニケーションの「場」としての支援事業. CIAS discussion paper No.25: 災害遺産と創造的復興: 地域情報学の知見を活用して 2012, 25: 159-160

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228478>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

講義7 アジアにおける災害対応(2)

コミュニケーションの「場」 としての支援事業

亀山 恵理子 奈良県立大学



今日お話しするのは、人道支援活動の一環として行われたある復興支援事業についてです。支援の現場ではさまざまな情報に接しますが、それらの情報とどのように付き合うのかという観点からお話します。

■ 支援する側とされる側とのあいだに 生じるズレにどう対応するか

多くの支援は「事業」という形で行われますが、まず事業とは何でしょうか。事業とは、「一定の期間の間に、一定の資源を使い、ある目標の達成をめざすもの」です。また、特定方向への変化を志向する性質もっています。地元社会にとっては、それまで続けてきた生活の中で、外部社会からの一時的な介入になります。それゆえ実際には、「支援する側」と「支援される側」の意図の間にはズレが生じることがあります。そのようなとき、現場のスタッフとしてどのように対



資料25-1 マングローブを植える

応すべきなのでしょう。このことを私自身がたずさわった事業の経験から考えてみます。

事業は、マングローブ植林地域防災事業という名称で、2007年12月から2009年12月まで約2年間にわたり行われました。実施地域は、アチェの北部海岸4県1



シンポジウム／ワークショップに参加して

インドネシア赤十字社アチェ州支部を訪れて

亀山 恵理子

アチェ のシアクアラ大学、津波博物館などで開催された国際シンポジウム・ワークショップに参加するために、2011年12月20日から27日までバンダアチェに滞在した。私自身は今回初めての滞在ではなく、以前に津波被災後の復興支援に従事していた日本赤十字社の派遣要員としてアチェ州内で働いていたことがある。当時はロスマウェという小さな町をベースに、北部海岸地域とバンダアチェを毎月行き来しながら、インドネシア赤十字社アチェ州支部と共同で復興支援事業の実施運営にたずさわっていた。

今回の滞在中には、バンダアチェにあるインドネシア赤十字社(PMI)アチェ州支部を訪問する機会があった。

ひっそりとしたPMIアチェ州支部の現在の事務所は、ほとんどの赤十字社がアチェにおける津波後の支援活動を終える2年ほど前までは、各国赤十字社や国際赤十字連盟が拠点として使っていた場所だった。当時は敷地内にあるそれぞれの建物にさまざまな国から来た赤十字社の事務所が入っており、スタッフとして働く外国人の姿もみられた。事務所内にはオフィスデスクと椅子、ファイルキャビネットなどが置かれており、スタッフは進行中の事業について会議をもったり、コンピューターに向かって活動報告書や会計報告を作成したりしていた。また、各国赤十字社対抗のバレーボール大会などが夕方に催されることもあった。

市に位置する9か村です。沿岸地域の災害対応能力の向上が目的であり、その目的を達成するために、①マングローブと木麻黄の植栽、②植林促進のためのキャンペーン活動などが行われました。マングローブを植えるにあたっては、村と援助機関の協議、植栽委員会の設置、植栽スケジュールづくり、実際の植栽活動というプロセスを踏みました。2年間の事業終了時には、合計約120万本の苗木が植えられました。

それでは、「マングローブを植える」ことは、事業関係者の間でどのように捉えられていたのでしょうか。事業実施機関・ドナーにとっては、「防災のために、マングローブが地域住民の手によって植えられる」という認識でした。つまり、マングローブ植栽は防災目的でしたが、このことが地元社会によって必ずしも共有されていないことが事業の中でわかりました。

■ズレを相手を理解する第一歩と捉え 共通の意味を育てこそ真の復興参加

北アチェ県のある村での話です。この村は、海岸部が養殖池に開発されています。しかし、近年それらの池からの生産は減少していました。また津波による被害を受け、被災後には養殖池自体の再建が行われています。この村でマングローブの植林が始まったとき、養殖池の持ち主は、‘bawa hutan’（森を運んでくるつもりなのか）と言って、植栽に乗り気ではありません

でした。それが2年目には、植栽を希望する人が前年度の倍以上の約80人に増えました。その理由は、マングローブを植えた人の池ではエビが育ち、収益があがったという話が広まったためでした。北アチェ県のその村では、マングローブ植栽には「以前のようにエビや魚が獲れるように」という願いがありました。

このように、なぜマングローブを植えるのかという意味づけは、アクターによって異なりました。事業においては、先の北アチェ県の村では植栽と防災が結びつきませんでした。しかし、たとえ事業が当初想定した話と現実が異なっていようと、外からの資源に価値が見いだされ、それがより良い変化につながるのであればよいのではないかと私は考えています。なぜ養殖池の再生を大切に考えるのか、その背景を探っていくきっかけとしたいと思います。

この点は、ある特定の方向へもっていくことをめざすという事業の性質上、実務者としてはジレンマ的でもあります。しかしながら、このようなズレの存在を知り得たとき、自分たちにとっての意味づけに修正しようとするのではなく、「ズレ」を相手への理解の第一歩と捉える。そして、「私たちの意味」をつくり出せたとき、事業を実施するだけではなく、真の意味でその土地の復興に参加したといえるのではないのでしょうか。

PMIアチェ州支部を訪問した際に、日本赤十字社がバンダアチェ事務所として使用していた建物の中に案内されたが、中の様子は当時とは大きく変わっていた。吹き抜けの壁には、津波後に支援活動を行った各国赤十字社の名前と国旗が飾られており、記念館のような雰囲気があった。そして二階に上がると、アチェ州の地図と5年間の支援活動の成果がボードに記されていた。各県にどれだけの救援機具・物資が配置され、研修を受けた救援ボランティアがどれだけ存在しているのかといった情報は、将来災害が発生した際に使われるという。

さらに一番奥にある小さな部屋に案内された。そこは以前は事業評価コンサルタントの作業部屋として使われていた場所だった。だが、現在は壁に鍵付のケースが備え付けられ、その中には津波の犠牲となり、PMIアチェ州支部が救助活動で遺体を回収した人たちの身分証明書が並べられていた。壁の端には、PMI代表理事と大統領も参列した津波から1年後の追悼式の写真が飾られていた。すっかり様相の変化した建物の中を目にして、私は当時一緒に仕事をしていた人たちの心の中を垣間見た気がした。

「前からこんな風にしたいと思っていましたか」と、小さ

な部屋の中で災害対応部のFさんに聞いてみると、「そうだよ、でも昔は場所がなかったからね」との答えが返ってきた。Fさんは災害対応部の実働部隊のリーダーを務めていたので、各国赤十字社との事業をすすめるために、ミーティングにワークショップにフィールドトリップにと多忙な日々を送っていた。そして多くの支援事業が終了した今、Fさんを含むPMIアチェ州支部の人たちは、あの記念館のようになった建物の中で、津波を契機に外から組織や人がやってきたことを記憶に刻むと同時に、津波の犠牲となった人びとへの弔いの気持ちを表している。短い時間ではあったが、期間が限られた支援事業を通じてのかかわりだけでは見えてこないことがあると感じたPMIアチェ州支部への訪問だった。